

地理歴史・公民における「課題発見・解決学習」の実際

1 本事例における「課題発見・解決学習」のポイント

①本事例における「課題発見」のポイント

生徒が、身近な問題を歴史的事象と関連させて、自ら「問い」を持つことによって始めて、解決すべき課題を発見できる。そのために、以下の(1)～(5)のプロセスを経ることが必要であると考える。

- (1) 生徒が有している認識（常識）を引き出す。
- (2) 生徒が有している認識（常識）に基づいて歴史的事象を考察させる。
- (3) 生徒が有している認識では説明できない歴史的事象を提示する。
- (4) 生徒に「変だな」「おかしいな」と思う箇所を指摘させる。
- (5) (4)での気付きをもとに、解決すべき学習課題として設定させる。（課題発見）

②本事例における「教師の働きかけ」のポイント

本事例においては、解決すべき「課題」を発見させるために、(1)～(5)のプロセスのうち、(3)歴史的事象の提示と(4)疑問に思う箇所を指摘させる場面が2度繰り返されている。

- (1) 現実社会の課題や生徒自身の認識を引き出すような発問をする。
 - ・皆さんはどんな地図を使いますか（最先端の地図を使いますか）。
- (2) 具体的に考えることができるように、3枚の地図を時系列で並べ替えさせる。
 - ・（蝦夷地と大陸について違う描き方をした地図を示して、）どれが最も古い地図ですか。

〔課題発見Ⅰ〕

- (3) シーボルトの地図を示し次のように発問することで、地図は時代が進むにつれて精緻化されていることを認識させる。

- ・江戸時代の庶民は、日本の領土にどのような認識をもっていたのか。
- ・幕府と西欧列強（諸外国）は、日本の領土について、どのような認識を持っていたか。
- ・シーボルトの地図が列強の日本の領域の認識を変えたことや、開国時の交渉結果を示し、列強と幕府がどのような認識を持っていたのか。

- (4) 新たな歴史的事象を提示して、疑問を生じさせる。

- ・なぜ、庶民は精密な地図があるのに、精密でない地図を使い続けたのだろうか。

〔課題発見Ⅱ〕

- (3) 課題発見Ⅰで獲得した知識では説明できない明治時代の地図を示すことで、明治時代の地図の使い方と政府が国民教育を行っていることの関係に気付かせ、明治時代になると、地図の精緻化の過程と時系列が一致することに気付かせる。

- (4) 課題発見Ⅰの結論と比較して、疑問を生じさせる。

- ・なぜ、明治時代になると精密な地図を使うようになったのだろうか。

- (5) 全体で共有できる課題を設定する。

- ・なぜ、江戸時代の庶民は、精密な地図があるのに、精密でない地図を使い続けたのだろうか。
- ・なぜ、明治時代の庶民は、精密な地図を使うようになったのだろうか。

③本事例における「振り返り」の工夫

- ・前時で学習した「近世の文化は為政者の独占する文化と庶民の生活文化が分断されているのに対し、近代の文化は近代化のために国民的な性格を持ち均質化されている」という概念をワークシートで整理させ、これを活用することによって、地図の機能・本質を問う。

「地図とは『何』が描かれているものだろうか。」

- ・②の(5)で設定した課題について再検討させ、生徒自身に獲得した概念が変容していることをメタ認知させる。

（授業前の生徒の概念）

「技術は常に発展する。」「庶民は技術を享受できる。」

（授業後の生徒の概念）

「近世では、知識は発展するが、知識の享受は政府と庶民の階級間で分断されている。」

「近代では、知識の享受は、政府の政策により階級間で均質化されている。」

2 指導助言者(広島大学大学院教育学研究科 草原 和博 教授)から

「課題発見・解決学習」は、大きくは2つに大別される。

第1に、子どもの学習意欲を基盤にして「課題」が発見され、その欲求が充足されることをもって「解決」とみなす学習である。「もっと●●したい」「もっと▲▼になりたい」「もっと■■と関わりたい」のように、子どもが本来有している内発的な欲求を課題発見の原動力とするものである。例えば、①「もっと安全な街に住みたい」→「災害に強い街をつくるには、どうしたらよいか」、②「内戦で苦しんでいる同世代の子どもを救いたい」→「子どもが安心して学校に通い、飲食できる世界をつくるために、私達にできることは何だろうか」、このような問いに代表されるものであり、子どもにとって自然で違和感のない課題成立の過程をたどる。課題の解決は、欲求を実現するための「方策」や実現を妨げている「背景」を子どもが調べ、発表し、行動する過程として組織されることになるだろう。いわゆるPBL型の授業は、これに該当する。

第2に、子どもの知的好奇心を基盤に「課題」が発見され、その好奇心が解消されることをもって「解決」とみなす学習である。「●●だと信じていたのに、▲▼なのは変だな。なぜ●●ではないのだろうか」のように、子どもの認知構造と外部から与えられるコンテンツとのずれを課題発見の原動力とするものである。具体的には、③「労働者は自分たちの主張を代弁する政党に投票するよね」→「労働者階級が選挙権を得た第1回普通選挙では既成政党（民政党・政友会）が議席を守った」→「おかしいな・なぜだろう」、④「工業化が進むと、経済が成長し、国民所得は増えるよね」→「工業化した南アメリカの国々では累積債務がどんどん膨らんだ」→「おかしいな・なぜだろう」、このような教師の意図的な介入をもって課題を発見させる。課題の解決は、仮説を立て、検証し、仮説を修正・定式化して、当初の認知構造を作り替える過程をたどることになるだろう。探究型と称される授業は、これに該当する。

本事例集では、後者に重点化して授業を紹介した。地理歴史科の教師には、教科の目標と単元の特性を踏まえ、適切なアプローチをとることが期待されている。

3 事例

◇ 本単元で育成する資質・能力

複数の資料をもとに歴史的な事象を時系列に沿って考察し、時代の特色を説明することができる力

◇ 学年 第2学年

◇ 単元名 化政文化

◇ 本単元の目標 近代を準備し、それを形成していく新しい要素の出現としての江戸後期の文化の特色を捉え、幕藩体制の崩壊から近代国家の形成につながる政治や社会との関連を考察することができる。

時	本単元の主な学習活動
1～3	『大日本沿海輿地全図』からその成立の背景となる諸要素を学び、諸学問との関連並びに庶民の経済力、当時の幕府にとっての「領域」確定の必要性を考察する。
4	『大日本沿海輿地全図』の成立前後の日本周辺地図から判断できる「領域」意識の変化について比較し、「日本の領域の概念」の成立について考察する。(本時1)
5	「日本の領域」について、国家と庶民の階級間での均質化は何によって行われたのか。また、「地図」には何が描かれてきたのかを考察する。(本時2)

[本単元の特徴]

本単元の目標を達成するために、近世の国家及び庶民の意識や生活の変化に着目させることで、地図の意義を国際環境と関連付けて考察させる取組を行う。
様々な地図を使うことができる現代の生徒が、3枚の地図を並べることで、地図の意義の変容に気づき、近代国家の形成と社会や文化の特色や、近世から近代への庶民の意識の変容について考察することができる。

◇ 本学習の目標

伊能忠敬の地図を含めた複数の近世の地図を比較することにより、地図の意義や、その作成の背景について考察し、その考察をもとに、近世と近代の違いが文化に与える影響について説明することができる。

◇ 学習の流れ(4・5時間目/全5時間)

学習過程 (○教師の発問, ●生徒の反応予測)	指導のポイント	評価規準〔観点〕 (評価方法)
1 課題を見いだす。【本時1】 ○皆さんは日頃どんな地図を使っているか。 ●インターネットの地図。新しい地図。詳しい地図等。 ・グループ学習を行う。 (1)○3枚の地図を古い順に並べ替えるとどのような順番になるか。その際の判断の理由を明確にして説明してみよう。 ●蝦夷地と樺太の描き方の差から、精密な地図③が新しいと判断する。3枚のうち、精密でない地図①と②の順番に迷う。 (2)○地図④の地図が世界に紹介されたことによって、ヨーロッパ人の日本の領域意識にどのような影響があったのだろうか。 ●幕府と列強が日本の領域に対してほぼ共通した認識を持つようになったのではないかと。 (3)○2枚の絵図(地図⑤⑥)を示し、地図⑤⑥が作成された時期を地図①～③の作成時期と比較するとどのような順番になるか。 ●蝦夷地の形からして、最も古い地図だろう。 ○2枚の絵図⑤⑥は最も新しい地図であるが、なぜ、庶民は精密な地図があるのに、精密でない絵図を使い続けたのだろうか。 ●正しい地図を知らなかったし、知る必要もなかったから。 ○明治時代に使われた地図(地図⑦)を示し、なぜ明治時代になると精密な地図を使うようになったのだろうか。 ●殖産興業、富国強兵。	【発問の意図】 地図は最新のものを使い、当然に手に入るという生徒の認識を引き出す。 【発問の意図】 古い順に地図を並べた判断の理由を、生徒の常識などの既知知識を活用し、具体的に説明させる。 地図①『大日本沿海要疆全図』(1854) 北方地域の詳細 ②『三国通覧図説』付図 (1785) ③『日本辺界略図』(1809) 伊能忠敬の測量や北方探検による最初の官製地図 (高橋景保) ・前時の学習の内容を確認することにより、歴史的な視点から、その関連を考察させ、説明させる。 【発問の意図】 シーボルトの持って帰った地図によって東アジアのイメージがヨーロッパで固定化されたことに気付かせる。また、幕府と列強の交渉で開港場が函館になった背景に、ヨーロッパ人の日本の領域への認識が、シーボルトの地図の影響であったことを考えさせる。 地図④シーボルト『日本』の挿入地図 【発問の意図】 地図⑤⑥(1867年頃だが不正確)が最も新しい地図であるという歴史的な事象を示し、精密さの単純な比較では説明できないことから、「なぜだろう」という問いを導く。 地図⑤『世界六大洲』, ⑥『伊万里焼地図皿』 ・精密な地図⑦が明治時代に使われていることから、江戸時代と明治時代の地図の意義の違いを意識させる。	他者の考えと自分の考えを擦り合わせ、より良い考えを導き出すことができる。 [思考・判断・表現] (観察・発表)
2 課題を設定する。 【課題】 なぜ、江戸時代の庶民は、精密な地図があるのに、地図⑤、⑥のような絵図を使い続けたのだろうか。なぜ、明治時代の庶民は、精密な地図を使うようになったのだろうか。		
3 課題解決を行う。 ○2つの課題について、それぞれの理由を考えよう。 ・導かれた課題に対して、それぞれのグループで解決策を話し合い、発表する。	【発問の意図】 近代では、階級の平準化と共に文化(知識)も平準化することに気付かせ、生徒の認識を成長させる。 ・近世、近代それぞれの文化や庶民の生活を調べさせる。 ・近世の文化と近代の文化の相違を、前者が主に庶民の生活文化として成り立ち、後者が国家による近代化政策と強く結び付いて形成されていたという視点で整理し、考察させる。	他者の考えや自分の考えを擦り合わせ、適切な表現で言語化できる。 [思考・判断・表現] (ワークシート)
4 自分の考え(解決策)を表現する。 ・グループ内で発表する。 ●近世では、庶民はそもそも正しい地図を知らなかったし、知る必要もなかった。 ●近代では、情報が庶民でも入手できるようになり教育が普及した。		
5 振り返りを行う。【本時2】 ・江戸時代と明治時代それぞれの地図の意義をまとめる。 ○地図とは「何」が描かれているものだろうか。 ●その時代の領土や領域への意識が描かれている。 ○時代毎の地図の変化から分かることは何か。 ●当時の国家の考え方が地図に現れている。	・ワークシートを活用して、概念を整理させる。 ・前時の振り返りとして、そもそも地図には「何」が描かれているものか、分かりやすく表現させる。 ・地図の変化から具体的に分かることを表現させ、なぜそのような表現がなされたのかを考察させ、設定した課題について獲得した概念を用いて説明させる。	

◇ 実践結果

【課題の練り上げの状況】

生徒自身の持つ浅い知識による議論から、歴史の概念的知識を活用した議論に成長させる。その上で、既習の知識では解決できない問題を考察させ、これを解決させるために必要な問いを発見させる。

(1) 生徒が有している認識（常識）を引き出す。

(2) 生徒が有している認識（常識）に基づいて具体的事象を考察させる。

T：次の地図①～③を古い順に並べ替えなさい。

T：並び替えた判断の理由を説明しなさい。

S：蝦夷地と樺太の描き方の丁寧さで見分ける。

〔課題発見Ⅰ〕

(3) 生徒が有している認識では説明できない歴史的事象を提示する。

T：地図④は日本について紹介された本の中にある地図ですが、誰がどのように作ったのでしょうか。

S：シーボルト。

S：日本で作られていた地図を真似した。

T：この地図が世界で紹介されたことによってどのような影響があったと思いますか。

S：ヨーロッパ人が日本とその周辺について、地理を知るようになった。

(4) 生徒に「変だな」「おかしいな」と思う箇所を指摘させる。

T：絵図⑤⑥を地図①～③とともに時代順に並べなさい。

S：絵図⑤⑥が最も古い地図だと思う。蝦夷地が載ってないから。

T：実は1867年頃に作成された最も新しい地図です。どんな人が使った絵図なんだろう。

S：一般人（庶民）

(5) (4)での気づきをもとに、解決すべき学習課題として設定させる。（課題発見①）

T：なぜ、江戸時代の庶民は、精密な地図があるのに精密でない絵図を使い続けたのだろうか。（課題①）

S：より正しい地図を庶民は知らなかったし、知る必要もなかった。知る方法もなかった。

T：地図⑦は明治時代に庶民に使われた地図です。

S：庶民が詳しい地図を使っている。

〔課題発見Ⅱ〕

(3) 生徒が有している認識では説明できない歴史的事象を提示する。

T：明治時代には国民に対してどのような政策が行われていましたか。（前時の復習）

(4) 生徒に「変だな」「おかしいな」と思う箇所を指摘させる。

S：殖産興業、富国強兵、国民教育。

(5) (4)での気づきをもとに、解決すべき学習課題として設定させる。（課題発見②）

T：なぜ、明治時代になると、精密な地図を使うようになったのだろうか。（課題②）

S：庶民は、情報が手に入りやすくなることによって新しい地理の知識を得た。情報は、教育の普及や新聞で得られるようになった。

S：日本の地理を知る必要性がでてきたことによって、知ろうとした。必要性とは、好奇心。

S：戦争に関係して領土や国の周辺地図を知る必要があったし、知りたかった。

【振り返りの成果】

振り返りにおいて、地図の意義について、次のように、歴史における為政者と庶民の立場や時代の違いをもとにして説明できるか否かについて検証できた。

T：地図とは「何」が描かれているものか。

S：各国の主張のぶつかり合い

S：用途に合わせた目的

T：時期による地図の変化から分かったことは何か。

S：地図が分ると世の中の見方が変わること。

S：社会や人々の意識が時期により変化すること。

◇ 検証及び今後の方向性

【検証】

(2)において、未知の資料を生徒に考察させたところ、蝦夷地と沿海州に注目して、概ね並べ替え、見分けることができている。地図の形状や、地理的な知識とともに、歴史的な知識を活用することができた。

〔課題発見Ⅰ〕(3)において、幕府と列強が、開国の時期に日本の領域についてほぼ共通した認識を持っていたと確認できており、個別的な知識（シーボルト）と幕府と列強の交渉という既習の歴史的事象を関連させることができていた。

〔課題発見Ⅰ〕(4)において、提示された資料と既習の歴史的な知識との矛盾を考察する中で、幕府・列強の為政者とは違う認識で地図（絵図）を使う庶民の意識に注目させたが、「日本の領域」についての、為政者と庶民との意識の乖離に気付かせるにとどまった。

〔課題発見Ⅰ〕(5)において、地図の目的が為政者と庶民とで異なる理由について、常識や既習の知識を総動員して回答しており、庶民に地図の存在を「知らせなかった」とする為政者側の理由と「知る必要もなかった」とする庶民側の理由等、複数の意見を出すことができていた。

〔課題発見Ⅱ〕(3)において、庶民の使用した江戸時代と明治時代の地図を比較することができ、獲得した知識や資料を使って違いを認識することができていた。

〔課題発見Ⅱ〕(4)において、〔課題発見Ⅰ〕(4)で得られた結論との違いを学習した内容を使って説明することができ、明治時代の政策と文化を関連させることができていた。

〔課題発見Ⅱ〕(5)において、近世から近代への転換で、教育の普及、情報の入手のしやすさ、対外的な戦争に注目する意見等、明治時代の政治や社会を踏まえた具体的な回答が得られたが、生徒の発言を課題の形式で教師がまとめてしまったため、生徒は課題を発見するというよりも課題を解決することに意識が集中してしまっていた。

【今後の方向性】

振り返りで使用したワークシートの結果から、本当に考察すべき課題がクラス全体で共有されていなかったことが分かった。具体的には、クラス全体で時代像を明確に反映させて深く考察させるために、地図とは「何」が描かれているかという問いを意識させる必要があった。教師が生徒の議論の方向性をファシリテートし、生徒が自ら課題を設定するよう導くことが必要である。

